

Professional Book

可能性に、挑もう。

2021 定期採用



PwC あらた有限責任監査法人

<https://www.pwc.com/jp/ja/careers/mid-career-a.html>
jp_aarata_teiki-mbx@pwc.com



© 2021 PwC. All rights reserved.
PwC refers to the PwC network member firms and/or their specified subsidiaries in Japan, and may sometimes refer to the PwC network.
Each of such firms and subsidiaries is a separate legal entity. Please see www.pwc.com/structure for further details.



PwC あらた有限責任監査法人



可能性に、挑もう。

あなたは、誰と、どんな未来を叶えるだろうか。

PwCあらたには、専門性を磨き続ける仲間がいる。
自分らしいキャリアを築く仲間がいる。
性別も、国籍も異なる仲間がお互いを尊重し、
個性を発揮できるフィールドがある。
私たちが何より大切にしているのは、社会に信頼を築くために、
より良い社会を創るために、変化も失敗も恐れず、
あらたな可能性に挑むこと。
あなたの挑戦が、世界をもっと飛躍させていく。

PwCあらたで、想像を超えるあなたに、未来に出会おう。

INDEX

04 データで見るPwCあらた

Chapter 01【仕事を知る】

- 08 PwCあらたが考えるプロフェッショナルとは
- 12 多様なニーズに応えるために部門を越えたビジネスのあり方
- 16 部門を越えた事例紹介
- 18 入社前と後で変わった仕事のリアル
- 22 Speak Up & Action

Chapter 02【働きがいを知る】

- 24 キャリアも子育ても楽しみ、両立 私らしく働くということ
- 26 国籍や言葉の壁を越えて グローバル視点で働くこと
- 28 プライベートも大切にする 私のワークライフバランス

Chapter 03【部門を知る】

- 30 キーパーソンが語る部門の魅力
テクノロジー・エンターテインメントアシュアランス部
- 31 消費財・産業財・サービス アシュアランス部
財務報告アドバイザリー部（製造流通サービス）
- 32 銀行・証券アシュアランス部／保険アシュアランス部
- 33 資産運用アシュアランス部／財務報告アドバイザリー部（金融）
- 34 サステナビリティ・アドバイザリー部／システム・プロセス・アシュアランス部
- 35 名古屋アシュアランス部／大阪アシュアランス部／福岡アシュアランス部

データで見る PwCあらた

若手職員にアンケートをおこない、働きがいや入社の決め手など、PwCあらたをデータ化しました。記事を読む前に見ることで、さらに理解が深まります。

Question

PwCあらたでの
働きがいとは？

1 自分が成長できる

2 いい仲間がいる

3 グローバルな環境で仕事ができる

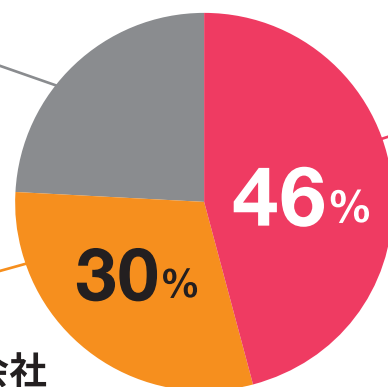
Question

あなたが思うPwCあらたはどんな会社？

その他
実力主義の会社
グローバルな会社
アットホームな会社
チームワークがいい会社



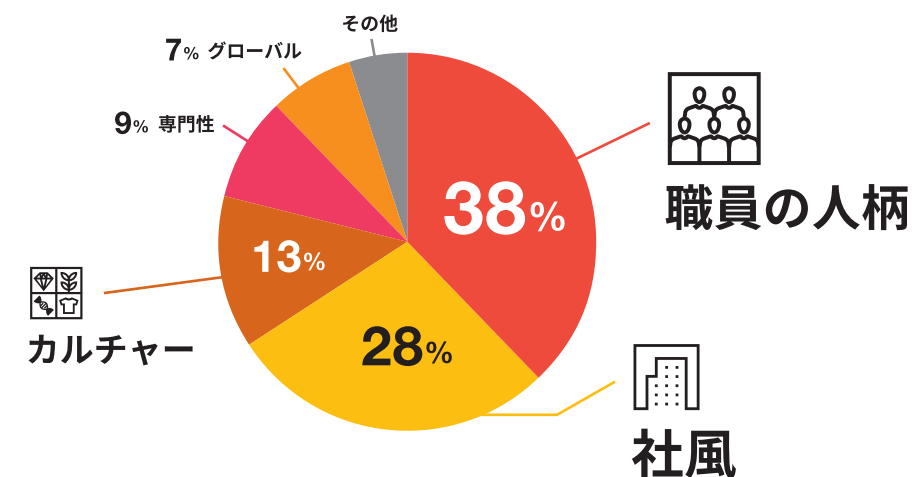
個性的な会社



自由な会社

Question

入社の決め手は？



Question

監査業務を通して得ることのできる楽しさとは？

クライアントの業界に
ついて詳しくなる

28%

ジョブで自分の価値を
発揮できたと感じる時

24%

常に新しいことに
チャレンジできる

21%

スピーディに成長
できている実感が
ある

16%

その他

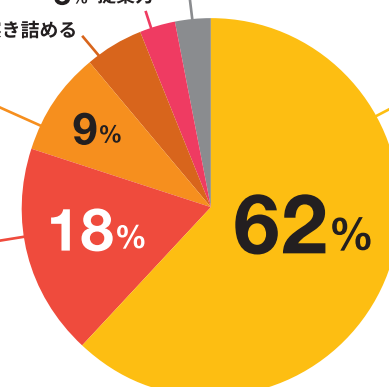
Question

実際にクライアントと仕事をするときに
大切だと感じるスキルとは？

3% ユーモア・雑談力
3% 提案力
5% 正しさを突き詰める
聞く力



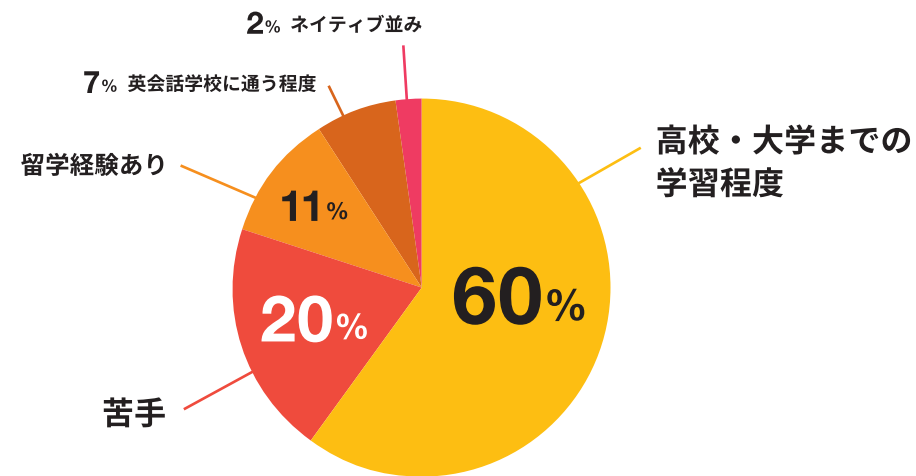
会計監査の
専門的知識



コミュニ
ケーション力

Question

入社時の英語のスキル



平均有給休暇取得率

Associate

75%

平均年次有給休暇取得日数

Associate

18.8日

男性の育児休暇取得率

62%

PwC Japan グループ女性職員比率

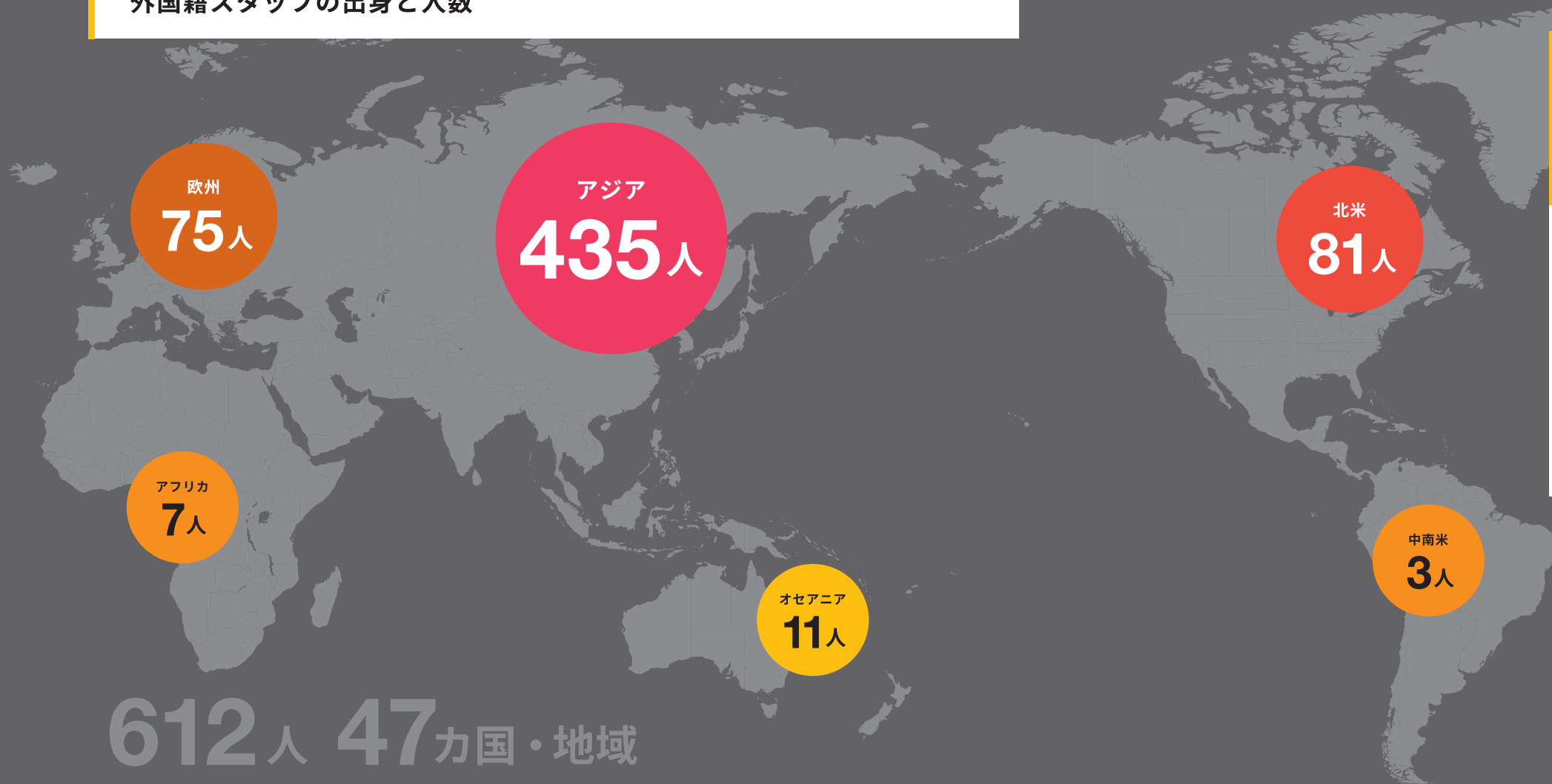
35.2%

障がい者定着率

85%

Data

外国籍スタッフの出身と人数



Question

入社後に身に付いたスキル

1 業界知識

2 問題解決スキル

3 デジタル知識

4 英語力

5 交渉力

6 提案力



Do the right thing

PwCあらたが考える プロフェッショナルとは

PwCあらたは、会計監査業務をはじめとするプロフェッショナル集団として、「Do the right thing」（正しいことをする）という組織文化の下、一人一人が信念を持って、ミッションを遂行しています。部門を越えた4名に、仕事との向き合い方などを聞きました。

What is a professional?



清水 麻奈美
保険アシュアランス部
マネージャー
2007年あらた監査法人（現、PwCあらた）入社。2018年より2年間、PwC米国法人ニューヨーク事務所へ出向。現在は外資系保険会社の監査を担当。



添野 俊雄
消費財・産業財・サービス アシュアランス部
シニアマネージャー
2009年あらた監査法人（現、PwCあらた）入社。2017年から3年間、PwC米国法人ボストン事務所へ出向。現在は製造業の上場会社などの監査に従事。



加藤 喜美
テクノロジー・エンターテインメントアシュアランス部
マネージャー
2010年あらた監査法人（現、PwCあらた）入社。テクノロジー、メディアなど、多彩な業種の監査を担当。現在はエンターテインメント企業を中心にサービスを提供。



上村 洋人
資産運用アシュアランス部
マネージャー
2008年あらた監査法人（現、PwCあらた）入社。2016年から2年間、内閣府へ出向。現在は国内投資信託、資産運用会社、インフラPEファンドなどの監査を担当。

時代の変化に対応し、努力し続ける力が プロフェッショナルへの道を切り拓く

清水 PwCあらたには、「自分はPwCという世界155カ国でプロフェッショナルサービスを提供するメンバーファームの一員だ」という、プライドを持って働いている人が多いですね。そのPwCのブランド名に恥じない人でありたいという気持ち、スタッフ一人一人が持つプロフェッショナルな意識に通じていると感じます。

加藤 同感です。クライアントからすると、新人もパートナーもPwCあらたのメンバーであることには変わりありません。年次が違って、そのとき自分が持っている最大限の能力を使い、誠意を持って取り組むことが求められます。
上村 そうですね。だからこそ先輩方も現状に甘んじることなく、経験や知識を高めるために、常に努力をし続けていると感じます。

添野 周りにそういうプロ意識が高いスタッフが多いから、私も自然と向上心を持って、継続して頑張ってきたのだと思います。

変化に対応する柔軟な考え方が その人の価値になっていく

清水 私は監査だけではなくアドバイザー業務も担当していますが、監査とアドバイザーでは仕事内容もチーム構成も異なります。求め

られる役割も働き方も違うので、そういう意味でも、PwCあらたでは、多様な働き方に対応するだけの柔軟性が必要とされます。

添野 分かります。柔軟性を身に付けるには、何より経験を積むことが大事です。私も、「いろいろな経験をする」という点では誰にも負けない自信があるというぐらい、こだわりを持ってやってきました。対話をして自分から情報を取りに動く、頂いた機会は全て巡り合わせだと思って大事にする、といったことを繰り返しながら、自分が理想とするプロフェッショナルを目指して突き進んできました。

上村 柔軟性という意味では、時代の変化に対応していく能力も求められますよね。会計監査では、急速に変わりゆくトレンドなどをキャッチアップしながら、常にクライアントと同じ目線で語ることができればなりません。今まで積み重ねた知識も、そのまま使うのではなく、アップデートしながら発信することで私たちは価値を生み出しています。

加藤 そのとおりですね。皆さんのお話を伺って、ここに集まっている4名は所属部門が異なりますが、PwCあらたにおいてプロフェッショナルとして必要なマインドは共通しているんだと実感しました。どの部門においても監査のトレンドや会計基準、業界の制度は毎年のように変わり

ますし、数年前と比べたらそれらを取り巻く環境は大きく変化しています。自分の価値を高めるためには、過去の実験だけにとらわれず、前向きに視野を広げていく意識が必須ですね。

導き出した正しい判断をもって 自分を信じて仕事に臨む

清水 プロフェッショナルについて考えるとき、PwCあらたの組織文化である「Do the right thing」（正しいことをする）という考え方も重要です。難しい課題に直面したとき、私がよく先輩からアドバイスされたのは、「他がどうやっているかは関係ない」ということでした。周りの人に迎合することなく、あくまで自分たちが考える正しい道を進むことが有用だということを教えてもらったんです。それが、PwCあらたのプライドに通じる部分だと思っています。

上村 自分を信じるということですよ。私は2年間、内閣府へ出向し、それまでやってきた監査とは違う業務を経験しましたが、そこで「Do the right thing」の考え方を生かすことができました。自ら情報を集め、進むべき方向を考えた上で、それを実現するというプロセスは、どんな仕事においても不可欠です。つまり、自分の出した答えを信じるということですが、それができれば、全く異なる環境にいても活躍できると実感しました。



添野 正しい判断を自分でするのは、ある意味とても難しく、エネルギーのいることです。出向先のPwC米国ボストン事務所では、「これはどう思う?」と聞く文化が根付いていました。それは、意見を尊重されていると同時に、常に正しい監査判断を問われているという緊張感がありました。しかし、そのおかげで、メンバーがそれぞれ自分の「Do the right thing」を真剣に考えたとき、チーム全体が強くなると気付かされました。実際、ボストン事務所では、一人一人がしっかりとした信念を持ち、時には反論しながら意見を言い合い、良いチームが構成されていました。その姿を見習い、私もチームマネージャーとなった今は、スタッフに「どう思う?」と問い掛け、本人が思う正しい判断を考えるきっかけを与えるようにしています。

加藤 私もマネージャーという立場となり、後輩たちを育てることをさらに考えるようになりました。そうやって、より「Do the right thing」を意識する機会が増えたように思います。一緒に働くシニアアソシエイトやアソシエイトから相談や質問を受け、回答する機会がたくさんありますが、ただ回答するだけではなく伝え方も大事にしています。正論を伝えるのは簡単ですが、ストレートに言うだけでは、せっかく築いた関係がバラバラになってしまうリスクがあります。相談者の気持ちに理解を示し、表現方法を工夫して相手が納得できる答え方を



するよう心掛けています。

正しい判断ができるメンバーを育て、 チーム全体を強くする

添野 会計監査の仕事はチームワークが要です。私は入社した頃、自分が強くなれば良いという考えで頑張っていましたが、一人で監査にかけられる時間は当然限られていますから、それでは限界がありました。クライアントの考えを理解して、自分が正しいと思う答えを導き出せるチームメンバーはどうしても必要なんです。そういうメンバーを育てていけないと、監査がプロジェクトとして成立しないと思っています。

清水 すごく分かります。PwCあらたが抱えている業務はチームでしか動かない大きなプロジェクトばかりです。優秀な若手を育て、チームが機能することが重要です。信頼できるメンバーがいることで、チームは一層強くなります。

上村 まさに、そのとおりだと思います。最大のパフォーマンスを発揮するためのチームマネジメントは成功のキーですね。私はチームを、いろいろな得意分野を持っているメンバーが働く小さなプロフェッショナル集団だと思っているんです。だから、後輩と接する際は個々の考え方を尊重して、その人の強みや能力を伸ばしてあげるよう努めています。

個人の努力が チームの未来を動かす 強いパワーになる



個性輝くメンバー同士 良い影響を与え合う

加藤 一人一人が重要な役割を担っているため、チームメンバーは誰一人欠けても成立しません。私は、優秀なスタッフを育てるためには、現場での教育がすごく大事だと思っており、研修講師も担当しているのですが、そこで、1:2:7の法則という話を聞く機会がありました。仕事で成長するには、1割は座学、2割はフィードバック、7割は現場での経験が必要だという内容です。これは、年次関係なく当てはまることだと思います。私自身、今でも現場で学べるものがたくさんあり、その話にすごく共感したんです。後輩たちは、失敗しながらでも良いので身をもった体験を積み重ねながら、成長してほしいですね。

清水 そうですね。PwCあらたのメンバーみんなが個性を出し合っていると感じます。1年目のスタッフでも10年目のマネージャーでもそれぞれ自分の意見を持っていて、それをきちんと表現できるんですよ。入社前、会計士

は真面目で物静かだというイメージがありましたが、いい意味で裏切られました。

添野 本当ですね。私は、海外で活躍したいという思いを抱えて入社した人が多くて驚きました。皆さん個性的で面白いんです。そんな空間だから、誰一人浮くことなく働いていますね。

上村 PwCあらたには、ユニークで優秀な人材が集まっているからこそ、良い影響を受けられる環境が整っていると思います。逆を言うと、自分も周囲に影響を与えられる存在でなければなりませんとも言えます。そう考えると、身が引き締まります。

加藤 確かに。PwCあらたは多様性を認める温かい風土に包まれていますね。

これから入社する候補者に 求める姿勢とは?

添野 新人の方には、ぜひ積極性を持ってほしいです。それがあれば、経験が増え、成長機会の獲得にもつながると思うんです。私が考えるプロフェッショナルとは、いろいろなことを経験し、経験したことについて自分の言葉とし

て相手へ伝え、それをもって相手にインパクトを与えることができる人です。経験を重ね、何度も価値を認めてもらうという体験のなかで、自分を高めていってほしいと思います。

上村 挑戦することは絶対に必要ですね。前に進んでいかないと取り残されてしまうので、新しいことを学ぶ、やりたいことが出てきたときに手を挙げる、一歩前へ踏み出す。私は、そんな姿勢を持っている人に入ってきてほしいです。

清水 PwCあらたでは、入社1年目からでも責任感を持った仕事を求められます。だから、私はぜひプライドを持った人に入社していただきたいです。PwCあらたの一員として恥ずかしくないように常に学び、成長し、しっかりと自信を持って自分の考えを発信できる方と一緒に仕事をしたいですね。

加藤 失敗を恐れず、諦めず、最後までやり遂げることは、仕事をする上で大切です。そういう姿勢に共感できる人が加わってくれたらうれしいです。PwCあらたには、信念を持ったプロフェッショナルが集まり、悩んだときはサポートしてくれる仲間がいます。時には立ち止まって考えながら一緒に前へ進みましょう。

チーム力

多様なニーズに応えるために 部門を越えたビジネスのあり方

PwCグローバルネットワークのメンバーファームである PwCあらたでは、国や組織、部門を越えて協働するプロジェクトが多数進行中です。これまで、個々が持つ専門性とチーム力を発揮して課題を解決してきた4名が、コラボする楽しさや今後の展望を語ります。

プロフェッショナル同士が組むことで 高度な価値が生まれる

河邊 PwCあらたにはさまざまな協働案件がありますが、みなさんはどのようなプロジェクトに携わってきましたか？

金児 印象に残っているのは、クライアントから海外の子会社で生じた会計的な問題について相談を受けたときの案件です。よく話を伺ってみると、論点は現地の税制に関する点であることが見てきたため、PwC税理士法人に相談する一方、現地の PwC のメンバーに現地の会計基準や法律についてのアドバイスをもらいました。PwC のネットワークを生かしたアドバイスができ、クライアントにも満足していただけたと思います。

亨 海外の PwC メンバーファームと連携をとる場合も多くありますよね。国をまたいだ案件

にも柔軟に対応できるのは、PwC あらたの強みの一つです。

田所 私は、PwC 税理士法人や PwC アドバイザリー合同会社と一緒に仕事をすることがよくあります。例えば、異業種の会社買収を行った場合、売り手と買い手、両社のガバナンスや人事規制に相違があることから、まずそこを整える必要が出てきます。このようなプロジェクトを成功させるためにはさまざまな知見を持った人が必要ですが、PwC あらたは柔軟な対応が可能だと感じました。

金児 異業種となると求められる専門性がより複雑になりますよね。そんなときに、横のつながりで適任な人材をピックアップできるのは心強いです。

河邊 私もそこは常々感じています。プロジェクトを進めていく過程で専門外の問題が発生したとしても、その分野に精通したプロフェッショナルが必ずいる。そう思うと安心して仕事ができますし、クライアントに対する成果物やサービスの品質も上がりますよね。

専門分野が違うからこそ 吸収できるものがある

亨 タッグを組む相手ごとにカルチャーや業務の進め方が変わるので、違う組織や部門の方々と一緒に仕事をすると非常に刺激になります。
金児 そうですね。普段自分たちでは考えつかないような視点から意見を頂けるとい点でも、



田所 美鈴

財務報告アドバイザー部（金融）
マネージャー

2008 年あらた監査法人（現、PwC あらた）入社し、TMT 部に所属。2020 年に金融 財務報告アドバイザー部に
出向。決算業務支援、SOX 評価支援、AUP を担う。



金児 利幸

財務報告アドバイザー部（製造流通サービス）
マネージャー

2008 年あらた監査法人（現、PwC あらた）入社。日本
基準・IFRS アドバイザリー業務に従事。PwC コンサル
ティング合同会社に出向経験あり。



亨 孝之

保険アシュアランス部
シニアマネージャー

2006 年あらた監査法人（現、PwC あらた）入社。保険
会社に対するアドバイザー業務を担当する。×コンサル
ティングや×タックスなど、幅広い協働案件に携わる。



河邊 瑛里加

銀行・証券アシュアランス部
マネージャー

2012 年あらた監査法人（現、PwC あらた）入社。2019
年から PwC コンサルティング合同会社と協働で投資銀
行バックオフィスの BPR アドバイザリー業務に従事。



Face the client
with professional teams.



「One Team」で 内外から信頼される存在を目指す

学ぶことが多いですよ。

田所 全くだす。それに、自分の知らないところを補い合える人と出会い、一緒に仕事ができるということが純粋に楽しいです。

河邊 PwCにはさまざまな分野のプロフェッショナルが集結していますからね。

田所 それぞれが違った専門性を持っているから、「知らないところは聞いてしまえ！」という、ある意味開き直りを持つことも大切ですよ。そうすることで、人間関係の距離も縮まるし、この問題のときはこの人に聞こう、というネットワークが広がります。

亨 同感です。個人でできることは限られるので、一人で解決できない部分は、プロジェクトのメンバーに力を借りる。そして、自分の持っている知識やスキルも存分に共有することも大切だと思っています。

河邊 そうですね。私はITコンサルのチームメンバーに対して銀行業特有の商品や業務プロセスを教えていますし、反対にそのメンバーからはシステム導入のノウハウを学んでいるので、ギブ&テイクな関係を築けていると思います。

亨 今後、複数の領域に関して知見があり、

掛け算で業務を遂行できる人物が、いろいろな場面で重宝されるようになるでしょう。だからこそ、多種多様なバックグラウンドを持った専門家と連携して仕事をする経験は、自分にとって非常にプラスになるとと思っています。

密なコミュニケーションが プロジェクト成功の鍵

河邊 垣根を越えての仕事は、時には部門間のギャップを感じることはありませんか？

金児 あります。特に、プロジェクトを進めていく上で、スケジュール感の違いを感じることは、あるあるではないでしょうか。私も、急ぎの案件だと思って急ピッチで取り組んでいたのに、他のチームは割とのんびり進めていたという経験があります。

田所 分かります。部門それぞれに組織風土があり、かつ一人一人のバックグラウンドも違うので、プロジェクトの進め方や、考え方、まとめ方など、どうしてもばらつきが出てきてしまうものです。そのなかで、足並みを揃えてプロジェクトと向き合っていくのは、少し大変な

ところでもありますよね。

亨 私も、ミーティング中、目指している方向は同じなのに、微妙に会話が噛み合わないと感じることがあります。例えば、それぞれの専門用語が出たときに、専門用語の前提となる知識がないと理解できない場合も。そこをいかに分かりやすく伝えるかを意識しなければ、話がスムーズに進んでいきません。

金児 そうですね。私は他の組織の方と話をするとき、専門用語を別の言葉に置き換えたり、ホワイトボードに図を書いて伝えたりと、なるべく噛み砕いて伝えることを心掛けています。

河邊 同じ部門内なら、ハイコンテキストなコミュニケーションでも意思疎通ができる部分もありますが、組織が変わるとそうはいかない。分かっているだろうという思い込みがミスを招くこともありますし、丁寧なコミュニケーションがとても大切ですよ。

亨 おっしゃるとおりです。異なる組織のメンバーが集まるので、タイムリーにコミュニケーションをとっていかないと、ちょっとしたことで方向性がずれていってしまいます。

河邊 それを防ぐためにも、パートナーも含め

たチーム全体で週に一回は定例の打ち合わせを行い、進捗や今後の動き方を確認するようにしています。加えて、パートナーを除く現場レベルでも情報をタイムリーに交換・共有する機会を設けるなど、コミュニケーション方法はチームで工夫をしています。

田所 今はオンライン会議が簡単にできるようになって、資料を画面に映しながらの会話が、どこにいても可能になりました。緊急で連携する必要が出たときも、すぐにリモートで意見のすり合わせができる。コロナ禍により、働き方は大きく変わりましたが、ツールなどの利用で密なコミュニケーションは取りやすくなったと感じます。

金児 確かに、連絡を取り合う頻度が格段に増え、よりスピーディーな対応ができるようになりました。

亨 このような情報共有はチーム力を高めるためにも重要ですよ。クライアントから聞いた最新の情報を他のチームに伝え忘れたということがあれば、クライアントからの信頼にも影響します。私は、PwCのメンバーファームが「One Team」として、いかにクライアントに信頼されるかというところに、いつも気を遣っています。

田所 「One Team」、いいですね。各部門のやり方やこだわりはあっても、より良い価値を生み出し、クライアントに提供したいという思

いはみんな同じです。クライアントもPwCのチームが最高のパフォーマンスを提供してくれると期待してくださっているので、その気持ちに応えられるよう、チーム一丸となって取り組んでいきたいですよ。

新たなコラボレーションで 時代に合った価値を作る

田所 今後、部門を越えたコラボ案件はどのように進化していくと思いますか？

金児 私は、監査法人に関して、会計基準だけというような仕事は今後少なくなるとしています。例えば昨今、企業が提示するESGやSDGsに関するレポートが重視されていますが、レポートを作成するには、さまざまな部署が必要な情報を収集するなど、社内各組織の連携が望まれます。そういう面でも、私たちのアドバイザーとしての需要が増えていくはずですよ。

河邊 異なる専門家同士が協働するからこそ成果が上がる案件が、今後さらに増加していくということですね。

亨 確かに、私の担当する保険業界でも、業務の効率化や、会計や規制の基準が変わることに伴い、新システムの導入や更改をする案件が増えてくることが予想されます。従来以上に幅広く、連携が必要になる予感がしますね。

河邊 私は、事業会社が資金決済サービスを

提供したり、IT企業が銀行業や証券業に進出したりと、事業会社と金融機関の垣根が低くなりつつあることに注目しています。新たに金融業界に参入する企業に対して、金融の監査やアドバイザーで培った知識や経験を生かした提案ができるはずですよ。コンサルティングをはじめ、他のPwCメンバーファームと連携する機会もさらに多くなるのではないかと考えています。

田所 他にも、異業種同士の企業の買収合併も、どんどん増えるはずですよ。部門の垣根だけでなく、国やエリアを越えた協働案件が増すことを期待しています。

亨 今後、想像しないようなビジネスの組み合わせが出てくるのでしょうか。そうしたら、今まで関わったことのない部門の方々と一緒に仕事をする機会が出てくる。そういうプロジェクトに巡り合えたら、自分の視野も広がるし、成長にもつながると思うので、私もどんどん関わってみたいです。

金児 求められる価値が多様化するの間違いではないでしょう。どんな案件を頼まれてもいいように、私たちもいろいろな業界に興味を持って、常にアンテナを張っておきたいところです。

田所 同感です。時代に合ったより良いものを作るためには、私たちの業務の仕方や考え方にも変化が求められるようになる。そのなかでも、変化に臆せず、楽しむぐらいの感覚を身に付け、新たな分野の案件にも挑戦していきたいです。



テクノロジー・エンターテインメント
アシュアランス部



銀行・証券
アシュアランス部

チームが一つとなって切り拓く
金融の未来を変えるフィンテックという新分野



テクノロジー・エンターテインメントアシュアランス部
シニアマネージャー
神林 徹
2008年あらた監査法人(現、PwCあらた)入社。2015年
から2年間、PwCオーストラリア法人シドニー事務所へ
出向。上場企業やIPOの監査、会計アドバイザーに従事。

銀行・証券アシュアランス部
シニアマネージャー
戸川 比呂司
2008年あらた監査法人(現、PwCあらた)入社。2015年
から2年間、PwC英国法人ロンドン事務所へ出向。現在
はフィンテック関連企業への各種業務に従事。

神林 フィンテック(金融とテクノロジーを組み合わせた造語)関連企業のコラボを私が初めて担当したのは、2017年。監査を担当していたメッセージングアプリの企業がキャッシュレス決済の分野に事業を拡大することになったのがきっかけでした。そこで、金融系の監査の知識が必要となり、戸川さんが所属する部門に声を掛けさせていただいたんですね。

戸川 はい。私はそれまで金融専門の部門で伝統的な銀行や証券会社のクライアントばかりを担当していましたので、躍進中の新分野にチャレンジできることが楽しみでした。

神林 携わったのは、新しいテクノロジーを使った金融業でしたから、全てが未知の分野でしたね。どこにも答えが書いていない分、二つの部門のチームワークが不可欠でした。

戸川 そのとおりです。私たちのチームの金融知識と、神林

さんたちのテクノロジーの知識をすり合わせ、綿密に検討を行いました。PwCあらたは各部門がそれぞれの専門領域に深い知識を持っているからこそ、協働の際に強い力を発揮します。

神林 クライアントが暗号資産サービスを開始するという時も、戸川さんに経験や知識があるため、クライアントとの議論においても、とても頼りになりました。

戸川 逆にクライアントの母体はテクノロジー系ということもあり、神林さんのチームにしかわからないことも多いので、お互いの考え方を共有することで、うまく進められましたね。

神林 そうですね。フィンテック系の企業は、今までにないビジネスをすごい速さで生み出しているため、柔軟な対応とスピード感ある意思決定が欠かせません。これからも部門間でしっかりとコミュニケーションをとっていきたいです。

IPOソリューション部



テクノロジー・エンターテインメント
アシュアランス部

IPOクライアントの要求を最優先に
チーム力を発揮し、プロジェクトを完結



IPOソリューション部
シニアマネージャー
石橋 篤
2007年あらた監査法人(現、PwCあらた)入社。2014年
から2年間、証券会社へ出向。現在はIPOに必要な
会計監査以外の体制整備のアドバイスを行う。

テクノロジー・エンターテインメントアシュアランス部
シニアマネージャー
飯島 瞬
設立して間もない法人とともに自分も成長したいと思い、
2007年あらた監査法人(現、PwCあらた)入社。現在は上
場企業およびその子会社の監査、IPO監査などに従事。

石橋 飯島さんのチームとは3件のプロジェクトでタッグを組んでいますが、最初のコラボは2018年でしたね。

飯島 はい。スピードが求められる、企業の上場案件がきっかけでした。当時、監査とIPO(新規株式上場)アドバイザー業務をPwCあらたでワンセットで行うことを提案させていただきました。

石橋 通常約3年はかかると言われるIPOのプロジェクトですが、それよりも早く完結できたのは、クライアントのご協力と部門を越えたチーム間の綿密なコミュニケーションがあったと思います。

飯島 確かに。それと、石橋さんが証券会社に出向した経験があったことも大きかったと感じます。IPOは通常の監査と違い、主幹事証券・クライアント・監査法人が手を取り合って進

めていきますが、関わる人が多い分、意見をまとめるのが大変です。証券会社が何を考え、何を大事にしているかという部分を石橋さんが理解していたので、とても助けられました。

石橋 良かったです。とはいえ、短期間でIPOを目指すのは並大抵のことではありませんでした。難局に直面しても私たちがリーダーが常に諦めない姿勢を示したことで、チーム全員が成功を信じて最後まで頑張れたのだと思います。

飯島 そうした体験が次のプロジェクトにも確実に生かされています。やはり資料を読むだけでなく、経験するなかでノウハウは増えていきます。今、新たな案件と一緒に進めていますが、ともに経験を積みながらクライアントの要求を的確に察知し、柔軟に応えられるチーム力を強めていきたいです。



若手職員に聞きました

入社前と後で変わった 仕事のリアル

監査・会計の業務に実際、携わってみると、入社前に抱いていたイメージと違うこと、新しく気付くことがたくさんあります。若手職員5名に、仕事のリアルや入社前に想像していたことと現実とのギャップ、それを踏まえた今後のキャリアの目標を聞きました。

(左より)

勝田 勇氣

銀行・証券アシュアランス部
シニアアソシエイト

2017年、学生非常勤職員として入社。2019年8月から約半年のアイランド語留学を経て2020年に正職員に。主に外資系証券会社の監査業務に従事。

菊地 俊喜

消費財・産業財・サービス アシュアランス部／アソシエイト

公務員を経験後、米国公認会計士の資格を取得。2020年PwCあらた有限責任監査法人入社。主に製造・卸売業の財務諸表監査、内部統制監査業務に従事。

中田 大基

テクノロジー・エンターテインメント
アシュアランス部／アソシエイト

2019年、学生非常勤職員として入社し、主にテクノロジー系企業の監査業務に従事する。2020年には、Digital Acceleratorsに選出される。

荒木 佑美奈

保険アシュアランス部
アソシエイト

2020年、学生非常勤職員として入社、2021年から正職員。損害保険会社の監査の他、「学生パートケアプロジェクト」の立ち上げなどの業務に従事。

竹政 理恵子

資産運用アシュアランス部
アソシエイト

2018年、公認会計士育成採用で入社。2019年10月から監査業務・金融規制に関するアドバイザー業務等に従事。入社1年半でVR研修の制作も担当。

What young professionals are thinking about work.

入社後に感じた 仕事の奥深さ 先輩のバックアップの ありがたさ

勝田 入社する前は、監査は会計士の資格試験で勉強した内容を使って仕事をするイメージでした。でも、入社して業務を始めてみると、それは基礎知識でしかないんだなって驚きました。

竹政 すごく分かります。私はコンサルタントを目指して就職活動をしているうちに、会計の専門知識があれば、自信を持ってクライアントに提案ができると思い、公認会計士の資格を取ることにしたんです。それでPwCあらたに入社し、現場に出たら、監査の奥深さに驚いてしまった。「クライアントの会計処理には答えがある」と思っていました。が、実際は、深い業界知識と監査・会計の理解が不可欠で、それをベースにクライアントに合わせて使い方を変えていかなくてはいけない。それが難しくて勉強の日々です。

荒木 現場では会計知識があるのは当たり前で、より高度なレベルが求められますよね。それもあって、最初に現場に出た頃は心細かった。特に私は、学生非常勤職員で入社したのが2020年4月。緊急事態宣言中で研修は全部オンラインでした。内容の理解度に不安もあり、気持ちを分かち合えそうな同期ともつながれなくて。

勝田 在宅勤務は私も最初、仕事の勝手が変わって戸惑いました。経験の少ない若手ならなおさらですよね。

荒木 でも、その不安や心細さを就活時代から



お世話になっているシニアマネージャーに相談したことが、次世代の学生非常勤職員をサポートする「学生パートケアプロジェクト」を立ち上げるきっかけになったんです。PwCの「Speak Up」って、まさにこういうことなんだと実感できました。また、「Speak Up」って職階の下の人が勇気を出して声を上げるイメージだったんですが、実は職階に関係なく自分の意見を発信し、一緒に考えて解決方法を導いていくという、すごく温かいものなんだと気付かされました。

中田 そうそう。上げた声を上司や先輩が受け止めてくれる「Listen Up」「Follow Up」がセットですよ。私も似た経験があります。デジタル分野で貢献したくて「Digital Accelerators」（デジタル時代のPwC Japan グループを担うリーダーの育成を目的としたトレーニングプログラム）の公募に挑戦したいと思ったのですが、学生非常勤職員は選考対象外かもしれないと悩んでいて。それを上司に相談したら、「前例はないけど、本気なら力になる」と推薦してくださり、最終的に選考に通ることができました。「選考されたら学生かど



うかは関係なく責任を持って全うし、PwCに貢献してください」という熱い言葉までいただき感謝しました。

菊地 PwCあらたでは、職階や経験の有無で区別せずに希望があれば聞いてくれるし、一人一人のやる気を大事にし、得意な部分を伸ばそうとしてくれるのを感じます。私は、前職は公務員で中途入社ですが、仕事で不利に感じることはないです。さまざまなバックグラウンドの人がいて、お互い協力したり刺激し合ったりできるのが、かえっていいと思うくらいです。

荒木 個人の意見を尊重して、やりたいと手を挙げたら、任せてくれる。そこは就職活動のときにPwCに抱いていたイメージどおりでした。

竹政 基本的には、不安も希望もよく聞いて対応してくれますよね。Eラーニングの研修も急速に進化しているし。私もVRを活用した研修をリリースさせてもらいました。

荒木 竹政さんのプロジェクトには、私も参加させてもらいました。PwCあらたでは部門を横断したプロジェクトが多くて、参加の機会も多い。それで同世代の知り合いも増えました。

菊地 PwCあらたでは、他部門の研修もEラーニングで受けられるから、私は空いた時間があれば、勉強のために受けるようにしています。

勝田 リモートワークでも、今は以前と同レベルのサービスを提供できています。約1年で、デジタルを活用して業務改革や業務効率化を進められたのもPwCあらたの底力だなと思います。

中田 デジタルの世界はトレンドの変化も激しいけれど、先手先手で取り組んでいますよね。

失敗はするもの。 それを乗り越えて 見えてきた将来の夢や 目標は？

荒木 仕事のできた話ばかりしていますが、実は失敗もあります。メールの宛名の漢字を間違えてしまったり。

竹政 私もありますよ。方向オンチで、案内してもらったことがある会社を訪問するのに、最寄り駅で迷子になってしまうこともありました。社内ミーティングで何の意見も言えなくなってしまうこともあります。

中田 私は、今までリーダーの役割を避けてきたのですが、慣れないなか任されたことがありました。その時のミーティングでスケジュールを曖昧にして終わらせてしまい、一緒に関わっている同期から、後で叱られました。皆の前でなく、電話で言ってくれたところに優しさを感じましたね。

竹政 失敗はいろいろしても、若手のうちは先輩たちがフォローしてくださいますよね。失敗も折り込みつつ、上手に仕事を振りながら育てようとしてくれます。「これをやり切れば世界が広がるよ」と難しい仕事をドンと渡されて、終わると本当にそのとおりになっています。

荒木 私の先輩は「がんばって屋根に登ろうとし

ている人には、いくらでもはしごをかけてあげる」と言ってくれて心強いです。後押ししてくれる安心感があると、頑張れますよね。

竹政 はい。先輩たちのようにクライアントから信頼される会計士になるための、今は基礎固め中だと思っています。質問できるのも失敗できるのも今のうちですね。

勝田 竹政さんは、入社前からコンサルティングやアドバイザリーという目的があったのはすごいですよね。私が学生非常勤職員で入社したときは、せいぜい「英語を使って仕事ができればカッコいいな」くらいの気持ちで、先のことまで考えていなかったです。その割には週5日も勤務していたから、PwCあらたで監査の仕事をするのが性に合っていたのかもしれない。

荒木 私も、将来のキャリアの目標はここで、そこから逆算して今この仕事をする、というタイプではないですね。目の前の仕事にしっかり取り組み、その積み重ねがキャリアにつながればいいと思っています。やりたいことが将来見つかった時に、それを実現できるのがPwCあらただと思っています。先ほど話した「学生パートケアプロジェクト」もまさにそれで、自分がリアルに感じた困り事を解決したいと思ってスタートしたので。

中田 私も荒木さんと同じです。ただ、私が取り組んでいるデジタル分野は、変化のスピードがものすごく早い。そこに向き合い続けることが、既に仕事での挑戦です。またそれが、将来のキャリアにつながるだろうと信じています。



菊地 私も、転職が目的で会計士の資格を取り、中途採用のハンデが少なく、海外駐在もできそうだという理由で入社したのですが、今は会計の仕事の奥深さに魅力を感じていて、監査以外の世界にも興味が広がっています。将来は、アドバイザリーに進むのもいいし、サステナビリティやESG（社会的責任投資）など、新しい分野に取り組むのもいいなと思い始めています。PwCあらたは将来の仕事の選択の幅が広いから、今後じっくり考えていこうと思います。



勝田 将来といっても、この先に何が起こるか分からない時代だし、デジタルやAIの進化で、監査に求められる役割も、数年、数カ月単位で変わっていく可能性もありますからね。ただ、デジタルの知見を身に付けておくことは、これからの時代に適合する上で大事だと思っています。私も今年、Digital Acceleratorsに参加するのですが、自分のキャリアの大きなプラスになると思って、楽しみにしています。

菊地 ここまで仕事の話ばかりでしたが、PwCあらたは入社初年度から有給休暇がきっちり取れて、ワークライフバランスが取りやすいという良さもありますよね。転職組の私は、特にそれを感じます。

勝田 そうそう。休日もしっかり休めます。それにPwCあらたには、キャリアアプランについて定期的に上司と相談する機会もあるし、また成果をきちんと評価してもらえる人事評価制度があるので、個々人が目標をもって自分のペースで働いていくことができると思います。

Speak Up & Action

若手職員のファーストキャリア

PwCあらたでは、「Speak Up」（役職や立場にとらわれず、自分の意見を自由に述べる）の文化が浸透しています。キャリアの浅い若手や学生非常勤職員からの意見が、新たな課題の糸口になることも少なくありません。座談会に参加した若手職員たちが実際に経験した「Speak Up」と、具体的な行動に移した「Action」を紹介します。

				
Act with integrity	Make a difference	Care	Work together	Reimagine the possible
正しいと思ったら声を上げる、それが困難と感じるときほど	常に世の中の情報に通じ、その将来について自分の意見を持つ	すべての人を個人として尊重し、その人にとって何が大切なかを理解する	様々な境界を越えて協働し、人脈、アイデア、知識を共有する	現状に挑戦することをいとわず、新しいことを試す
最高のクオリティを期待し、生み出す	同僚、クライアント、そして社会とともに、行動を通じてインパクトを生み出す	一人ひとりの貢献を認め合う	多種多様な視点、人材、アイデアを求め、それらを結びつける	創造する、試す、失敗から学ぶ
自分自身のレピュテーションが問われているかのように決断し行動する	絶えず変化する環境にスピード感をもって対応する	周りの人の成長をサポートし、その人が最も能力を発揮できるやり方を尊重する	双方向のフィードバックを通じて、互いを高め合う	いかなるアイデアに対しても先入観を持たない



Act with integrity



竹政 理恵子

正しいと思えることに声を上げる

「VRを活用した不正会計体験プログラム」を提案してリリースしました。監査は、資料のなかに不正発見のヒントとなる情報が含まれていることを常に意識する必要があります。このプログラムは、不正発生の擬似体験をすることで、若手が実際の現場での注意力を高められるようにしたものです。制作過程では「不正を見逃さない」という会計士の使命に常に立ち返ることや、自分の意見を持って行動する大切さを、改めて実感することができました。



Make a difference



勝田 勇氣

変化する環境にスピーディに対応

昨年、在宅勤務となった当初は、対面とは違う仕事の進め方に戸惑いました。しかし1年あまりが経った今、クライアントにはこれまでと変わらないクオリティのサービスが提供でき、リモートワークは職員の働き方のオプションとして定着。これはPwCあらたが、業務の効率化や最先端のデジタルツールを導入した業務改革を飛躍的に進めたからでしょう。時代の流れに迅速かつ柔軟に対応できる企業で働いていることを幸せに思います。



Work together



菊地 俊喜

さまざまな境界を越えて協働

外資系企業の監査業務で、海外から出向してきたインチャージ（主査）と働く機会がありました。前年の資料のない初年度監査でしたが、インチャージからは出身国で採用されているIFRSの留意点などを指導いただき、私からは日本語での調整やビジネス慣行の情報提供などを行うなど協力してスムーズに終わることができました。さまざまなバックグラウンドを持つ人同士が、異なる能力や経験を生かして働く現場を経験できたのは貴重でした。



Reimagine the possible



中田 大基

挑戦をいとわず、新しいことを試す

デジタル分野に大きな関心を持って入社した私にとって、Digital Accelerators（デジタル分野での次世代リーダーの育成を目的としたプログラム）は魅力的でした。学生非常勤職員が応募できるのが不安でしたが、マネージャーに相談したところ「前例はないが本気なら力になる」と推薦していただき、最終的に選考に通ることができました。チャレンジを応援してくれるPwCあらたの文化に感謝し、今後の会社への貢献を誓った瞬間でした。



Care



荒木 佑美奈

周りの人の成長をサポートする

2020年の緊急事態宣言中に学生非常勤職員として入社したため、研修は全てオンライン。理解度に不安を抱えたまま現場へ配属され、心細かった経験を上司に相談しました。それが「学生パートケアプロジェクト」を始動させるきっかけに。次世代の学生非常勤職員がPwCあらたの一員として有意義に過ごせるよう交流とケアの場を提供するもので、最終的に法人を横断するプロジェクトになりました。これがPwCあらたの「Speak Up」文化なのだと実感しました。

キャリアも子育ても楽しみ、両立

私らしく働くということ

消費財・産業財・サービス アシュアランス部
マネージャー

吉川 恵理

2012年あらた監査法人(現、PwCあらた)入社。2017年2月から2018年8月まで産前産後休業・育児休業を取得。定時退社を条件に復職し、オンオフをうまく切り替えて仕事と育児を両立している。現在は、休職前と同じ部門に所属し、監査業務に従事。

2017年から1年6カ月、産前産後休業・育児休業を取得しました。復職にあたり、業務内容や勤務時間への不安があったので、事前に今後の働き方について上司に相談。「休職前と同じ部署で、残業なし、出張なしの9時～17時勤務」という私が希望する条件での復職が決定しました。加えて、子供が熱を出すなど急な保育園のお迎えにも対応できるよう、事務所から30分以内で移動可能なクライアントを担当したり、夕方以降にミーティングが入らないよう調整したりと、細かなところまで配慮していただきました。育児支援の制度が整っているのはもちろん、こうした上司や同僚の理解のおかげで、安心して復職できたと思います。

周りのサポートに支えられる一方で、私もできるだけチームに迷惑をかけないように、限られた時間でいかに効率よく業務を進めていくかを、より一層考えるようになりました。結果的に集中して仕事に取り組むことができ、メリハリのあふれた充実した日々を送ることができています。

※2021年7月1日付、マネージャーに昇進。

出産後も個々の希望に沿った形で

復職できる環境とサポートがある

子育ても、自分のスキルアップも。

どちらの実現も目指しています

財務報告アドバイザリー部(金融)
マネージャー

新田 久美子

外資系企業で営業職を経験後、2007年あらた監査法人(現、PwCあらた)入社。財務報告アドバイザリー部(金融)に所属し、金融機関や事業法人向け内部統制関連アドバイザリー、USGAAP、IFRSコンパジェンス支援などに携わる。2015年に第1子、2017年に第2子を出産、約1年半ずつの産前産後休業・育児休業を取得。

私は、ニュース・金融情報配信サービス企業の営業職から、キャリアチェンジを目指して米国公認会計士の勉強を始め、PwCあらたに転職しました。入社以来、財務報告アドバイザリー部に所属し、主に内部統制関連の業務を手掛けています。途中、第1子と第2子の産前産後休業・育児休業を約1年半ずつ取得しました。制度はどの企業にもありますが、PwCあらたは子育て支援がきめ細やかだと感じます。先輩ママからアドバイスを聞く機会を設けてくれたり、提携している保活コンシェルジュが保育園の情報を収集してくれたりというサービスは、特にありがたかったです。

仕事と育児を両立することは楽とは言えないですが、チームの仲間にも、業務の課題や情報を共有し、お互いサポートしやすいようにするなど、協力してもらって大変助かっています。幸いPwCあらたには、声を上げて理解を求めれば、周りが耳を傾けてくれる文化が根付いています。こうした環境は、実は制度が整っていること以上に、仕事と子育てを両立する頼もしい力になっていると思います。

ただ、私は子どもとの時間は大切にしていますが、責任ある立場でもあるので、仕事を大きくセーブすることまでは考えていません。専門性を高めることでクライアントの信頼を得ていけるこの仕事にやりがいを感じていますし、結果としてキャリアがついてくれればいいと思っています。育児も仕事も、人によってさまざまな考え方、向き合い方があります。PwCあらたは、そうした一人一人の思いを尊重してくれるのもいいところだと実感しています。

国籍や言葉の壁を越えて

グローバル視点で働くこと

世界155カ国に284,000人以上のスタッフを擁するPwCグローバルネットワークのメンバーファームであるPwCあらたには、グローバルで活躍するチャンスが至るところにあります。海外赴任を経験した2人が語る働きがいとは。

監査という共通言語を使い

海外でプロフェッショナルとして活躍する

テクノロジー・エンターテインメントアシュアランス部
シニアマネージャー

八田 浩輔

2008年あらた監査法人(現、PwCあらた)入社。海外のチームと協力しながら監査をしたプロジェクトをきっかけに、海外へ行きたいという希望を持つ。2015年に4カ月間、PwCオーストラリア法人シドニー事務所へ短期赴任。2017年から2020年までPwC米国法人シカゴ事務所へ赴任し、現地日系企業の監査を担当。

学生時代、漠然と海外で働いてみたいという思いはありましたが、PwCあらたを選じた一番の決め手は「Speak Up」という法人の社風でした。そんな私がグローバルに展開されている企業の監査に携わった際、監査のメソッド(方法論)は全世界共通の言語なのだと気づきました。国や文化が違う人たちと監査という共通言語を使って、協力しながら共通のゴールを目指すというプロセスは苦労以上に達成感があり、監査人として経験できることの広がりを感じた瞬間でした。その後、海外

赴任の希望をし続けて、入社7年目にPwCオーストラリアのシドニー事務所へ短期赴任、入社9年目にPwC米国シカゴ事務所への赴任のチャンスを得ることができました。英語が得意というわけではありませんでしたが、赴任前に海外からの駐在員と話すことで、実践的な会話の基礎を築けたと思います。

米国では入社1年目であってもスタッフが自分の考えをしっかりとし、それを発言するカルチャーがあります。私もそれに倣い、トップダウンで方針を決めるのではなく、メンバーの意見を聞きながらみんなが納得感のある方針を決めることを心掛けていました。それは日本に戻ってからも続けています。重要なのは英語の流暢さよりプロフェッショナルとして自分の意見をもち、発信することです。

お互いの意見をすり合わせながら課題を解決するなかで、信頼関係も築けます。監査は全世界共通の言語という点に気付けると、グローバルで活躍する監査人像をぐっと身近に感じてもらえるのではないのでしょうか。

海外赴任の経験を生かし

日本と海外をつなぐ架け橋に

資産運用アシュアランス部
シニアアソシエイト

濱田 由有子

2016年PwCあらた有限責任監査法人入社。資産運用アシュアランス部に配属される。2019年12月から、PwCオーストラリア法人シドニー事務所へ向。金融部に所属し、資産運用業の監査業務を主担当とする他、金融業のアドバイザリー業務、ジャパン・サービス・デスクのリレーション業務を兼任。

元々「日本と海外をつなぐ架け橋になる」という夢があり、入社当時から海外赴任を希望していましたので、入社2年目にPwCオーストラリアへの出向が決まったときは、想像以上に早く望みが叶ったことに驚きを隠せませんでした。出向前は、外国籍のファンドを担当することが多く、英語でのやりとりも頻繁にありましたが、それらの知識やスキルが海外でも通用するのか、正直不安もありました。しかし、いざ来てみると、国は違えど業務の本質は変わらないことを実感。今までの経

験を生かすこともでき、日本で培ったことは間違っていないかと、自信をもって業務に取り組んでいます。とはいえ、時には文化の違いにとまどうこともあります。移民国家ということもあり、PwCオーストラリアのメンバーは非常に国際色豊かです。国籍や価値観などが違うなかで、みんなが気持ちよく働ける環境を作るのは大変なこと。私も、コーヒ一片手にカジュアルなミーティングをするなど、誰もが意見を言えるような雰囲気作りを常に心掛けています。

今、日本の資産運用業界では、海外の企業と関わる案件が増加中で、グローバルに強い人材が必要とされています。そんななか、資産運用の深い知識を持ち、かつ海外での業務経験のある公認会計士はごくわずかです。実経験があるからこそ、プロジェクトを進めていく上での細かな留意点や注意点に気付き、共有できる。今後も、「日本と海外をつなぐ架け橋になる」という夢を実践し続けられるよう、オーストラリアで得た知識と経験を還元していきたいです。

プライベートも大切に

私のワークライフバランス



仕事は短時間で集中的に。

子どもとの時間もしっかり確保

財務報告アドバイザリー部（製造流通サービス）
マネージャー

福島 幸恵

2003年中央青山監査法人入社。2006年、あらた監査法人（現、PwCあらた）設立と同時に移籍。2013年に一般事業会社に出向し、2015年の帰任後は、財務報告アドバイザリー部（製造流通サービス）に所属。産前産後休業・育児休業からの復職後は、プロセスマイニングツールを活用したアドバイザリー業務などに従事。

産前産後休業・育児休業を約2年取得し、2021年1月に復職しました。以前は仕事をしていく限り上を目指さなければならなかったと思っていましたが、今は昇進が全てではないと考えています。これは、近年会社の制度がより柔軟になり、個々が望む働き方が今まで以上に尊重されるようになったこと、出産しワークライフバランスに対する意識が変わったことによります。そのため現在はライフに比重を置いた生活をしたいという思いから、1日5時間の時短勤務制度を利用しています。また、コロナ禍ということもあり、リモートワーク中心の生活を送っています。

今は昇進には固執していませんが、会計士として活躍したいという思いは変わらないので、スキルアップの努力は欠かしません。例えば、復職後は、「プロセスマイニングツール」という、企業における業務プロセスを可視化できるITツールを使った、新たなアドバイザリー業務に挑戦しています。時間の融通が利きやすく、在宅でもできるという点が、私の理想の働き方とマッチしていることもあり、今では仕事の主軸となっています。周囲の理解もあるおかげで、子どもの急な体調不良にも対応しやすくなり、子どもと向き合う時間をより一層作り出せるようになりました。復職前は仕事と育児の両立に不安もありましたが、WPN（Working Parents Network）という働く親のネットワークでの情報共有の場も活用し、周囲に励まし助けられながら、プライベートも仕事も充実した、慌ただしくも楽しい生活を送れていると実感しています。

財務報告アドバイザリー部（金融）
マネージャー

大西 陽介

他監査法人から、2016年、PwCあらた有限責任監査法人に転職。金融機関に対するIFRS会計決算サポート等に従事する。2018年、PwCビジネスアシュアランス合同会社に出向後、PwCあらたに帰任。現在は、事業会社の資金管理アドバイスなどに従事。2017年に第1子、2019年に第2子が誕生。

夫婦共働きで、5歳と2歳の子どもがいます。父親として子どもの成長を最も感じるこの時期は、育児に深く関わりたいと思い、18時過ぎには帰宅し、入浴、食事、寝かしつけまでしています。この時間を、私は「育児のゴールデンタイム」と呼んでいます。仕事を予定通り終えるには、周囲の理解も必要なため、事情はしっかり話しています。例えば、私のチームでは18時以降のミーティングはなし。これも「Speak Up」ですね。これを続けた結果、他のメンバーも早めに仕事を切り上げ、自由な時間を作るようになりました。それでも成果は出ているので、メリハリのある働き方に役立っているのではと自負しています。

昨年からは、コロナ禍でリモートワークが一気に進みました。私の場合、子どもが保育園から帰ってくる時間には完全に業務終了。通勤時間もなくなり、さらに家族と過ごす時間が増えました。場所を問わず仕事ができることが周知されたので、今後もリモートワークは定着するでしょう。PwCあらたでは、リモートワークに制限をつけない「ハイブリッドワーク」という働き方が認められるようになりました。この制度を利用すれば、一定の制約の下、首都圏以外に住み、必要なときだけ東京の事務所に通勤することも可能です。実は私もそうで、所属は変わらず、より良い子育て環境やプライベートの充実を求めて妻の実家がある京都に移住しました。「ワーク」も「ライフ」も妥協したくないから、限られた時間を効率よく使う。この考え方を会社も尊重してくれるのはありがたいです。

PwCあらたでは、職員それぞれのニーズに応じて多様かつ柔軟な働き方ができるよう支援する制度を整備しています。ワークライフバランスを実現する2人に、プロフェッショナルとしてのやりがいとプライベートの充実について聞きました。



仕事の効率を上げて時間を作る。

より良い子育て環境を求めて京都へ

キーパーソンが語る 部門の魅力

PwCあらたは、社会からの期待にあわせて、監査、あるいはブローダーアシュアランスサービス（BAS）によりさまざまな領域で信頼の構築と重要な課題の解決を行っており、部門の垣根を作ることなく、連携して業務を行っています。それぞれの部門やエリアで活躍するキーパーソンたちが、所属する組織の魅力や働きがい、キャリアパスについて語ります。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト

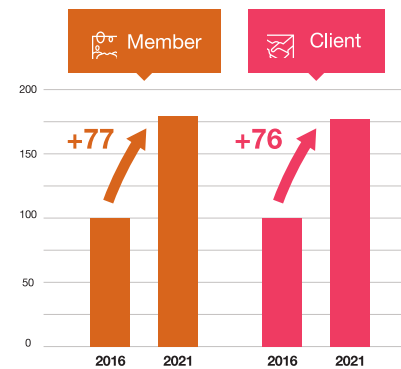


ディレクター
岩本 展枝

2005年中央青山監査法人入社。2006年、あらた監査法人（現、PwCあらた）設立と同時に移籍。国内企業の会計監査やアドバイザリー業務、法人内のデジタル推進活動に従事。

ビジネストレンドの最先端を走り続けているIoT（Internet of Things）、AI、VR、ロボット、ゲーム、SNS、音楽、映画など、未来の「楽しい」を創造する業界のクライアントの監査を担当しています。当部門では「考える力」や自主性が尊重されているため、入社1年目であっても専門家としての意見を求められることも。好奇心旺盛なメンバーが多く、「楽しい」「スマート」「オープン」「ハッピー」なカルチャーが育っています。

さらに当部門では、監査業務の変革をリードすべく、若手メンバーがメインのデジタル推進チームが中心となって、独自の取り組みを積極的に展開。個人やチームの成果を共有し、互いの貢献に対して賞賛を贈り合う文化も根付いており、毎年行われる表彰イベント「TMT Digital Award」では多くの若手メンバーのアイデアが表彰されています。次回の大賞は、あなたのアイデアかもしれません！



拡大を続ける、TMT 業界

TMT（テクノロジー、エンターテインメント＆メディア、情報通信）業種に関するビジネスの拡大に伴い、2016年からの5年間で、当部門のクライアント数および所属する人員数ともに増加を続けています。具体的に、2016年の規模を100とすると、いずれも5年間で70%を超える増加率になっています。

[CIPS] 消費財・産業財・サービス アシュアランス部

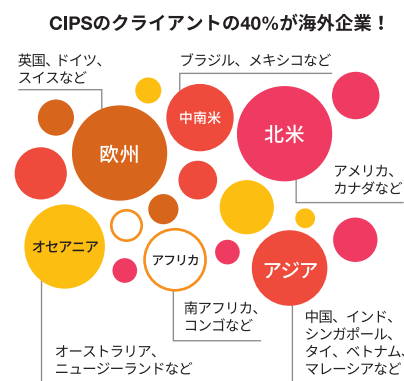


パートナー
鵜飼 千恵

1993年青山監査法人入社。2006年、あらた監査法人（現、PwCあらた）設立と同時に移籍。上場企業等の監査業務および外資系企業のリファードワークに従事。

消費財・産業財・サービス アシュアランス部をひと言で表すなら、「多様な“暮らし”のフィールド」です。自動車、製薬、化学、エネルギー、アパレル、外食、商社、パブリック・ヘルスケアなど、私たちの暮らしに密着したビジネスを展開するクライアントを監査することで、社会のインフラを支えていると言えます。身近な企業ばかりで、その業務内容や数字をイメージしやすく、皆さんが受験で学んだことを生かしやすい部門なので、若いうちから充実感をもって監査業務に携わることができます。そのなかで、物事を俯瞰し、社会における問題を解決できる、一流の専門家に成長することを目指しています。

また、アドバイザリー業務との兼務や海外オフィス駐在、官公庁や事業会社への出向など多くの実績があり、他部門への異動やPwC Japanグループ内の転籍も含めて、それぞれのメンバーが描くキャリアパスを柔軟にサポートします。



各国のPwCメンバーファームと協働

暮らしを支えるCIPSのクライアントは世界中に展開。各国のPwCメンバーファームが、これらのクライアントにサービスを提供しています。そのため、多国籍チームでの業務や海外とのオンライン会議など、日本にいなからグローバル視点をもって活躍できる数多くのチャンスがあります。

[MDSFRA] 財務報告アドバイザリー部（製造流通サービス）

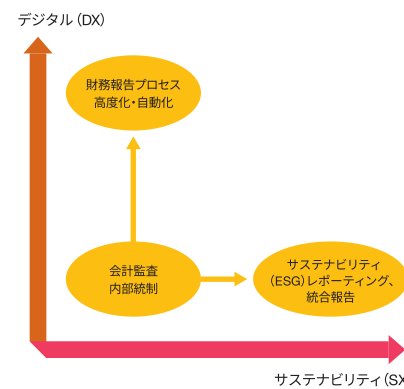
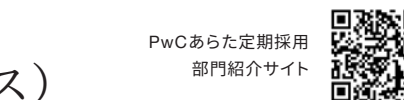


シニアマネージャー
中村 良佑

2006年あらた監査法人（現、PwCあらた）入社。レポートニングに関するアドバイザリーに携わる。IFRSに加え、統合報告、ESGなどを中心に担当。

部門のビジョンは、「CFOのTrusted Advisorになる」こと。クライアントが世の中に対して提示する情報、そしてそれを作成するためのプロセスや仕組みが「信頼」に足るものでなければならないことを心に置きながら日々、業務に接しています。

かつては財務報告を中心に、さまざまなアドバイザリーを提供してきましたが、近年は「デジタル（DX）」や「サステナビリティ／ESG（SX）」が急速に拡大。近いうちにDX×SXという世界も広がってくるでしょう。そのため、従来は公認会計士が多くを占めていた当部門も、さまざまな人材が集まっています。バックグラウンドの違いを理解し合い、力を合わせることで、クライアントに新しい価値を提供できると信じています。ですから、入社1年目の若手であっても、躊躇せずに新しいアイデアをどんどん発信してもらえるとうれしいです。



時代の変化に即したサービスを提供

社会の変化とともに、クライアントが抱えている課題はより多様化しています。そのため、私たちのアドバイザリーも、従来からの会計基準や内部統制だけではなく、財務報告プロセスの高度化・自動化や、サステナビリティ（ESG）レポートニング、統合報告など、大きく広がりを見せています。

[BCM] 銀行・証券アシュアランス部



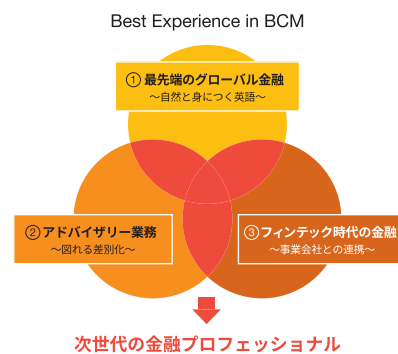
マネージャー
富岡 英美

2008年あらた監査法人（現、PwC あらた）入社。現在は、主に外資系証券会社の監査、日系大手金融機関に対する業務効率化に関するアドバイザリー業務に従事。

銀行・証券業界を中心に、数多くの外資系大手金融機関をクライアントに持つ銀行・証券アシュアランス部では、監査業務を提供するなかで、最先端の金融に触れるチャンスがたくさんあります。加えて、従来の金融業務にとらわれず、フィンテック時代において事業会社と連携した業務を行うことで、新たなスキルを身に付け、次世代の金融を牽引できます。

グローバルな金融機関を担当するので、若い年次から自然と英語力を高められる上、成長の機会は日本の金融機関の会計監査のみから得られる経験にとどまりません。業務で培った幅広い知識やスキルを生かし、アドバイザリー業務に関与する機会も多くあり、金融のプロフェッショナルとして日々挑戦することができます。そのため、所属する職員も、自分自身や部門のより良い変化をいとわない、むしろ変化を起こしていこうという前向きな姿勢を持っています。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト



BCMで実現できる経験

- ①最先端のグローバル金融に触れ、英語力も向上します。
 - ②アドバイザリーも経験でき、差別化を図れます。
 - ③事業会社と連携した金融に接し、フィンテック時代の金融をリードします。
- 普通の会計士ではできない、これらの経験をもとに、次世代の金融プロフェッショナルへと成長できます。

[AWM] 資産運用アシュアランス部



マネージャー
上村 洋人

2008年あらた監査法人（現、PwC あらた）入社。2016年から2年間の内閣府への退職出向を経て、2018年に再入社。現在は、主に監査業務に従事。

資産運用アシュアランス部は、投資ファンドや運用会社に対する監査やアドバイザリー業務を主に行っています。ファンドと言っても、株や債権、不動産、未上場株式、インフラなど、投資対象はさまざま。そのなかから興味がある分野に特化して知識を付けていくので、メンバーは一人一人が異なる専門性を持っています。その上、監査対象であるファンドが小規模なため、チームで分業するというよりも、個々が独立して働くスタイルが軸に。当然、プロジェクトマネジメントを求められることもあり、若いうちから多くの経験を積んでいけます。

資産運用ビジネスは、ここ数年で飛躍的に成長。新しい投資対象や運用会社が続々と登場し、会計や監査も時代に応じて変わることが求められています。その分野のリーディングファームで働くことにより、専門性を身に付け自らの価値を高めつつ、業界の発展にも貢献できます。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト



AWMを知るための

3つのキーポイント

- ① 成長を続けるファンドビジネス
- ② 多様な投資対象、多彩なスキルセット
- ③ クライアントの信頼を守るべく、高め合う

オンリーワンの専門性が磨ける

①ファンドビジネスは、金融のなかでは比較的新しい業態であり、今後飛躍的な成長が期待できます。②ひと言にファンドと言ってもその種類はさまざま。私たちの専門性も多様に変化していくことが求められます。③業界のリーディングファームで、自分だけのキャリアを築くことができます。

[INS] 保険アシュアランス部



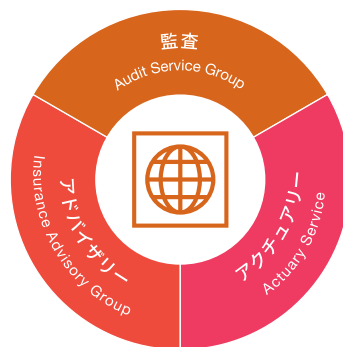
アソシエイト
赤松 奈緒

2019年 PwC あらた有限責任監査法人入社。大手損害保険会社の監査業務に従事しつつ、小規模監査チームのインチャージにも挑戦している。

昨今、保険会社を取り巻く環境は目まぐるしく変化しており、直面する課題も多岐にわたっています。それらの課題に対して新たなソリューションを探索し続けるべく、保険アシュアランス部では「専門性」「多様性」「柔軟性」を持つ組織づくりを目指しています。業界のリーディングファームをクライアントとして抱えているため、挑戦的な業務が多いですが、保険会計や数理といった専門スキルを備えたメンバーと協働することで、高度な知識やかけがえのない経験を得られ、自身の成長にもつながります。

監査のみならずアドバイザリー、アクチュアリー業務にも希望すれば若手のうちから関与でき、幅広い選択肢から自分らしいキャリアを実現することが可能です。これまでも数多くの若手が PwC グローバルネットワークや他のメンバーファームなどとの共同プロジェクトに挑戦し、法人や部門に新しい風を吹かせています。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト



柔軟なキャリアパスを実現

監査、アドバイザリー、アクチュアリーの3グループで構成されています。グループ間の垣根は低く、監査グループに配属されたメンバーであってもアドバイザリー業務やアクチュアリー業務への関与ができ、個々が目指すプロフェッショナル像に近づくためのキャリアパスを柔軟に選択できます。

[FSFRA] 財務報告アドバイザリー部（金融）



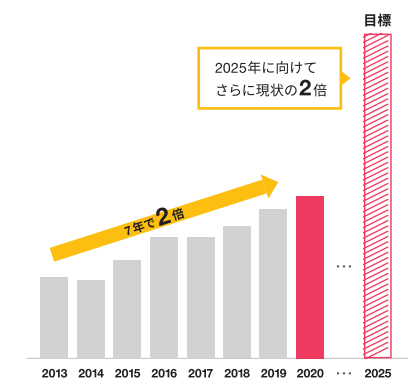
ディレクター
服部 雄介

2004年中央青山監査法人入社。2006年、あらた監査法人（現、PwC あらた）設立と同時に移籍。主に、大手銀行の日本基準・米国基準・IFRS に関する会計アドバイザリーを行う。

財務報告アドバイザリー部（金融）は、会計アドバイザリーがメインの部門です。主なクライアントは金融機関ですが、近年は大手通信会社や製薬会社など一般事業会社にもサービスを提供。クライアント先に常駐するスタイルでサポートを行う場合が多く、システム導入や新金融規制への対応、M&Aを含む海外進出など、会計以外についての相談が年々増えています。

こうした業務拡大に伴い、他部門や PwC Japan グループとの協働案件が多く、部門内にも会計士の資格を持たない専門家が多数在籍。各メンバーのバックグラウンドも多様性に富んでおり、プロジェクトごとにさまざまな知識を吸収できます。さらに、アドバイザリーは、クライアントのニーズに応え、これまで誰もやったことのないような業務に対して討議を重ね、結論を出すのが仕事。新しいことにチャレンジすることが好きな方に向いていると思います。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト



設立以来、成長し続ける部門

2007年の設立以来、成長し続けているアドバイザリー部門です。会計、内部統制業務からスタートし、その後も時代の変化とともに新しいサービスを創出。直近の年度でも、設立以来、最高売上を更新しました。現在も専門チームを設けて新サービスを開発しており、さらなる成長を目指しています。

[SUS]

サステナビリティ・アドバイザリー部



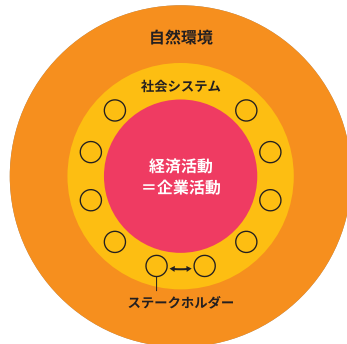
マネージャー
吉原 大樹

2018年PwCあらた有限責任監査法人入社。現在は、情報開示を起点としたサステナビリティマネジメント改善の支援を行う。

私たちは情報開示を起点として、クライアントのサステナビリティマネジメント(長期的な企業価値向上のためのビジネスアプローチ)の向上を支援しています。企業が長期的に発展するためには、ビジネスの土台となる自然環境の維持や人権などの社会問題への配慮が必要となるため、クライアントへの支援が社会の持続可能な発展にも寄与すると考えられます。この点に、当部門が行う業務の社会的な意義があり、強くやりがいを感じます。また、企業の長期的な発展を考えるにあたり、社会の長期的な変化を捉えることが不可欠であるため、業務を通じて社会の変化をひしひしと感じることができる点も醍醐味の一つです。

さらに、チームメンバーは国籍を含めて多様なバックグラウンドと専門性を有しており、そのなかで多くの刺激を受け、互いに切磋琢磨できる点にも当部門の魅力を感じます。

サステナビリティ経営
支援サービスについて



企業のサステナビリティ領域

SUSが支援する企業のサステナビリティは、環境や社会を視野に入れて、企業が長期的に持続可能な経済活動を行う土壌づくりにつながります。自然環境や社会システムは刻々と変化しています。このような国内外の変化にスピーディに、適切に対応するため幅広い国籍のメンバーがいます。

[SPA]

システム・プロセス・アシュアランス部



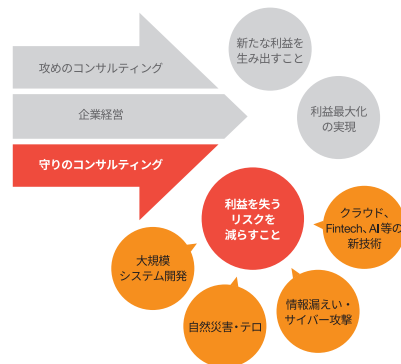
パートナー
平松 宏一郎

1996年監査法人伊東会計事務所入社。2006年、あらた監査法人(現、PwCあらた)設立と同時に移籍。米国上場企業を含む内部統制監査、システムレビューに数多く従事。

システム・プロセス・アシュアランス部は、システムレビュー(監査の一貫で実施するITリスクに対する内部統制評価)業務で培った5つのコンピテンシー(リスク管理・業務プロセス・ITシステム・組織・データ)を活用し、デジタル時代の監査をリードしています。また、システムやセキュリティのガバナンス・コンプライアンス、デジタル化が進む業務プロセスなどの領域に潜むリスクを洗い出し、未然に防ぐ「守りのコンサルティング」も提供。客観的な立場から保証(安心)を与えることで、クライアントの利益とデジタル社会の信頼構築に貢献しています。

メンバーは会計士だけでなく、コンサルタントやSE、事業会社出身など多彩な専門性を持つプロフェッショナルぞろいです。共に切磋琢磨することで多様な価値観を身に付け、会計・監査にとどまらないDX時代のスペシャリストとして成長し続けることができる環境が整っています。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト



守りのコンサルティングをリード

システム・プロセス・アシュアランス部は、利益を失うリスクを減らす「守りのコンサルティング」で、クライアントの利益最大化に貢献。企業の外部・内部に潜むリスクが多様化し、また企業の外部に知見を求める声に合わせて、取り扱うリスクマネジメントの領域も広がっています。

[NGO]

名古屋アシュアランス部



シニアアソシエイト
吉川 拓真

名古屋事務所は、分からないことがあればすぐに先輩や同期に相談できる雰囲気の良さが魅力です。また、日本経済を牽引する自動車メーカーをはじめ、大手製造業の監査に携わることができ、非常にやりがいを感じられます。さらに、海外に拠点を持つクライアントも多く、グローバルな仕事ができる機会も豊富にあります。やりたいと手を挙げれば年次や職階に関係なくチャンスをもたらえる職場なので、モチベーションを高く持って仕事をすることができます。私自身、いずれ海外赴任をしたいという目標があるので

が、今のうちから海外の案件をいろいろと任せていただき、自身のスキルアップに励むことができます。また、「Digital Accelerators」(デジタル時代のPwC Japanグループを担うリーダーの育成を目的としたトレーニングプログラム)にも参加させていただいており、本格的なデジタル社会を迎える上で必要な知識やスキルを習得しているところです。

このように個々の希望を尊重し、先を見据えてどんどん新しいことに全社的に取り組む姿勢がとても素晴らしい事務所だと思います。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト



[OSA]

大阪アシュアランス部



アソシエイト
藤澤 俊介

大阪事務所はスタッフ全員の顔と名前を覚えられるちょうど良い規模感で、非常にアットホームな雰囲気です。パートナーやマネージャーとの距離も近く、事務所で仕事をしていると「調子、どう?」と気さくに声を掛けてもらえるなど、フラットに会話できるカルチャーが浸透しているからか、「Speak Up」の文化がより凝縮されている印象があります。かつ、繁忙期でもチームメンバーのケアを忘れない器の大きな先輩方に恵まれているおかげで、私自身も後輩に対してそうありたいと身が引き締まる思いです。

また、部門が分かれていないからこそ、会計士としての成長機会が豊富にあるのも大阪事務所の魅力の一つ。アシュアランス業務だけでなく、そこから派生したアドバイザリー業務や、海外からのリファードワークなど幅広い業務に携わるなかで、自分が興味のある分野を自ずと知ることができます。私の場合は、アシュアランス業務の深遠さを知り、監査を極めたいと思うようになりました。他の監査法人や他事務所では得られない多様な経験は自らの糧となり、将来的なキャリア選択に役立つはずです。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト



[FKO]

福岡アシュアランス部



アソシエイト
田淵 冬馬

福岡事務所は、ワンフロアに約30名の職員が在籍しています。お互いの顔と名前が一致し、職階を超えたコミュニケーションが取りやすい環境で、活気と団結力をもって「九州を盛り上げていこう」という意欲に満ちています。2016年に開設した、成長段階の事務所でもあるため、東京、名古屋、大阪といった他事務所や他部門のメンバーと連携する機会が多いのも特徴です。そのため、さまざまなバックグラウンドを持った人たちと接することができ、若いうちから知見を深められます。また、少数精鋭な分、新人でも

プロフェッショナルとしての意見を求められ、監査業務だけでなく、アドバイザリー業務にも挑戦することも可能です。アドバイザリー業務では、監査人とは異なる視点でクライアントと接するので、視野がぐんと広がります。

このように多岐にわたる経験を積むことで、独自のキャリアを形成できるのも福岡事務所の魅力です。個の意見を尊重してくれる風土があるので、個性を生かして組織に貢献しつつ、事務所とともに成長していくことに働きがいを感じられます。

PwCあらた定期採用
部門紹介サイト

